

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520333

研究課題名(和文)シェイクスピア・フォリオの書き込みにみられる読者像

研究課題名(英文)Shakespearean Readership seen in the Folio marginalia

研究代表者

住本 規子 (Sumimoto, Noriko)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：10247174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：シェイクスピア・フォリオという「もの」に残された読者の痕跡から、当時の読者がどのようにシェイクスピアを受容していたのかを探る研究である。

本課題で最も詳細に読者の書き込み行動の分析ができたのは、オックスフォード大学ボドレー図書館所蔵のセカンド・フォリオの場合である。そこでは、18世紀初頭の読者がシェイクスピア(フォリオテキスト)を「新版シェイクスピア」に準じて改良すべきものととらえ、はじめは王政復古期の改作版に準じて改訂作業をおこなったものの、ロウ編纂の全集(1709)が出ると「改作」と「原作」の区別に気付いたかのように、ロウ本準拠でフォリオを「現代化」したことが分析の結果判明した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to clarify how the early modern readers read Shakespeare by analyzing readers' manuscript annotations in the extant copies of Shakespearean Folios.

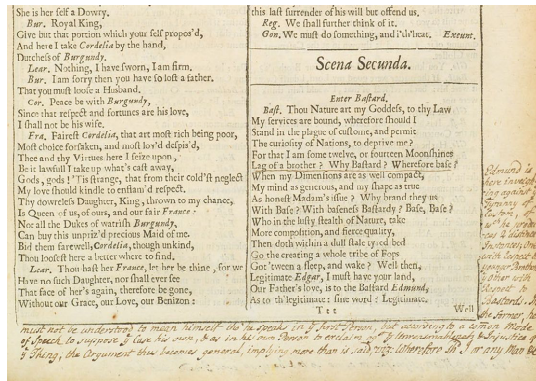
In the case of Bodleian Second Folio, Arch.Gc.9, two kinds of annotation written in slightly different colored ink and yet in the same hand were found to tell an interesting story about Shakespearean reception around 1700: the reader known by the name of John Prater first attempted to update his Folio Shakespeare by the Restoration Shakespearean adaptations but later, when Nicholas Rowe's edition was published, he dropped the practice and resumed updating anew by that edition. He probably realized the importance of the original Shakespeare rather than the adapted one.

研究分野：英文学・書誌学

キーワード：英米文学 シェイクスピア・フォリオ マージナリア 読者論

1. 研究開始当初の背景

(1) 動機：明星大学図書館所蔵シェイクスピア・サード・フォリオ (MR733) には、18世紀のシェイクスピア・エディションのひとつであるサー・トマス・ハンマーの編纂本が搭載する脚注がほとんどすべてフォリオの欄外に18世紀半ば頃と推定される筆跡で書き込まれている。例として下図に *King Lear* 1幕2場冒頭の書き込みを示す。



このような書き込み行動がほかのフォリオにも行われた形跡があるのかどうかを調べて、MR733の読者の行動を相対化したいというのがこの研究の出発点となっている。

(2) 学術的背景

国内外における研究動向：ひろく読者による書き込みはすでに研究対象として William Sherman, *Used Books* (2008) によって確立されていた。シェイクスピア・フォリオに残された書き込みの研究は Yamada Akihiro, ed. *The First Folio of Shakespeare: A Transcript of Contemporary Marginalia in a Copy of the Kodama Memorial Library of Meisei University* (雄松堂, 1998) が、ほとんど唯一の例であった。セカンド・フォリオ以降の3つのフォリオにおける書き込み研究は本課題研究代表者のものをのぞくと、まだない、といってよい状況であった。ただし、Shakespeare Configurations (フランスのモンペリエ大学にて2010年9月29日から10月1日にかけて開催された国際シンポジウム。上述の Sherman を発起人の一人に据え、‘configuration’ という新概念を用いてシェイクスピア自身による文化・文学受容をも含む受容研究という幅広い関心のもとに、15本の発表を共有した) における本課題研究代表者の発表 ‘Updating Shakespeare: customising readers’ reconfigurations of Shakespeare’ も関心をもって迎えられたことから、本研究の国際的認知は得られたものと判断された。

本課題研究代表者による先行研究：2007年～2009年におこなった課題「フォルジャー図書館所蔵のシェイクスピア・フォリオにおける読者の書き込み」(19520266)において、17世紀に出版されたシェイクスピア・フォリオに、18世紀のエディションの新装置

(具体的には、作者評伝、整備された登場人物表、ト書き、幕場割り表示、語注や校訂注、校訂された本文、そして場面やセリフの評価標識、材源情報などの中から選択的に) を手書きで移入するという18世紀の読者行動が、明星大学所蔵本(MR733)だけでなく、フォルジャー図書館所蔵本にも複数保存されている行動であることを明らかになった。

さらに、ロウ、ポウプ、ハンマーと基盤になった版本の歴史順に書き込み行動を捉え直すことで、書き込み行動には個々の読者の関心のあり方とともに、その関心自体が版本という文化装置によって成形されている可能性が浮かび上がった。具体的には、‘Updating Shakespeare’をまとめる際、ボドリアン図書館所蔵 Gc.9 の書き込みを再読していて、その読者・所有者が Rowe 本参照による所有フォリオのアップデートに着手する前に、すでに、同時代の上演テキストという(ダヴェナントの改作等の)「現代版」参照によるアップデートに着手していたのではないか、という点に思い至ったことが直接本課題の着想に結びついた。

2. 研究の目的

本研究は、17世紀に4版まで出版されたシェイクスピア・フォリオの現存するコピーに残された読者の書き込みの蒐集、転写、分析することで得られるデータと、上演や出版、ジャーナリズムなどの資料とをつきあわせることで、主として18世紀の読者によるシェイクスピア受容の実態について、より具体的な解析を試みることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 書き込みのあるフォリオの実地調査：フォルジャー・シェイクスピア・図書館やオックスフォード大学のボドレー図書館などで、これまでの調査で不十分であった情報収集の精度を高めるための調査をした。具体的には、フォリオの書き込み調査では、2011年以降、閲覧調査が許可された海外の図書館(フォルジャー・シェイクスピア図書館、ボドレー図書館、ナショナル・アート・ライブラリー、それにグラスゴー大学図書館)のすべてで、研究目的の個人使用に限ってデジタルカメラでの撮影も許されたので、画像データの入手が飛躍的に簡便化した。本研究はこのことにより大きな恩恵を受けた。

(2) 文献調査：

研究論文、研究書の探索をとおして、上演や出版物におけるシェイクスピア受容の指標となる情報の収集にあたった。

(3) 国際交流：

国内ではほとんど行われていない研究であるがゆえに関連分野の研究に従事している海外の研究者との交流が有用であった。具体的手段として、シンポジウム開催(2013年)

を活用した。

4. 研究成果

(1) 書き込みのあるフォリオの閲覧および画像収集を以下の図書館でおこなった。フォリオの版と冊数は以下の通りである。アスタリスク付きの図書館では撮影許可を得ることができた。

* ボドレー図書館 : F1、F2、F3、F4

大英図書館 F2、F3x2

* フォルジャー図書館 F1x13、F2x6、F3x2、F4x3

* National Art Library (ロンドン、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館内) F1x1、F2x4、F3x1

* Glasgow University Library F1x1、F2x2、F4x1

Bibliothèque d'agglomération de Saint-Omer F1

甲南女子大学 F1、F2、F3、F4

京都外国語大学 F1、F2、F3、F4

とくに詳細に注目したいコピーはボドレー図書館の Gc 9、Gc13、フォルジャー図書館の F1-70、それに、グラスゴー大学図書館の Sp Coll BD8-b.1 があげられる。この研究期間内に全貌解明に近づいたのは、このうち、本研究のターゲットコピーというべき Gc.9 の書き込みである。

(2) ボドレー図書館所蔵のセカンド・フォリオ (Arch.Gc.9) の書き込みの分析で判明したこと

同時代ステージへの言及 :

Gc.9 は 1632 年出版のセカンド・フォリオの *Cymbeline* の後に 1685 年出版のフォース・フォリオのアポクリファ部分がつけられた状態で製本された合本コピーである。タイトルページ ([pi]A2) には、肖像画の直ぐ上に、セカンド・フォリオのタイトルにつづけて「うしろに 1685 年版ではじめて印刷された 7 作品が付けられている」旨がインク書きされている。所有者は 'John Prater' なる自署を "John Prater / Ex Liber / 1700" [pi]A1r や、"John Prater Ex Liber 1698" [pi]A2 (TP)、また、"John Prater" gg 5 (*Titus*) といった具合にコピーに記している。

筆跡から恐らく Prater 自身と考えられる書き込み者は、登場人物表が整備されていない作品のすべてにそれを手作りするのだが、悲劇の *Timon of Athens* から *Hamlet* にかけての登場人物表には、18 世紀当時の俳優名が添えられ、*Julius Caesar* と *Macbeth* のそれには、さらに上演情報が加えられている。*Caesar* には "for ye Incorigmt: of ye comedian Act: in ye haymarket & to Enable them to keep up ye Diversion of plays /

under a Separate Interest: from Operas. Att ye Queens theatre in ye haymt: on Tuesday ye [1]4th of Jan 1707/6 / will be Revivd ye Tragedy of Julius Caesar by Subscription" (nn3v) と、また、*Macbeth* には "haymarket. 29 decem 1707[1 の位の 7 の上に 6 と書かれている]" (pp2r) とある。そうした情報の内容は、今日、我々が *The London Stage 1660-1800, Part 2, 1700-1729* (Ed. Emmett L. Avery, 1960) に整理されている上演記録で確認ができるものに合致している。こうした情報は新聞等の上演広告からも得られたはずだから、書き込み者が実際に当の劇場に足を運んだのかどうかは判断できないが、同時代舞台への興味を感じさせはする。書き込み者は同時代のステージを、所有するフォリオのページに反映させようとしたのだろうか。

Macbeth の書き込みから判明したこと : *Julius Caesar* 本文ページには、ロウ本依拠という方針を逸脱する書き込みは見あたらないが、*Macbeth* ではそれが頻出する。分析を試みたところ、ほとんど全てが、ダヴェナントによる翻案 *Macbeth* (1674, 1687, 1695) と綿密に校合した結果であること、すなわち、全作品に対してロウ本依拠のもとでアップデート作業をしたように、この作品ではダヴェナント版依拠による同様の作業を、おなじ筆跡の人物が、ロウ本依拠による作業の前に行っていたこと、が明らかになった。ここではその概要を記すこととする。

1 幕 2 場の冒頭、"King. What bloody man is that? he can report, / As seemeth by his plight, of the Revolt / The newest state. Mal. This is the Serjeant," (TLN 18-21) という行に対して、書き込み者は "bloody", "by his plight", "Serjeant" をそれぞれ括弧で囲み、空いているスペースに、"aged", "by his looks", "ye Issue of ye battle", "ye Valiant Seaton" (nn4a) という語句を書き入れることで、ダヴェナント版の読み "King. What aged man is that? if we may guess / His message by his looks, he can relate the / Issue of the battle? / Male. This is the Valiant Seyton" (1695, A3) を取り入れようとする。

次に戦場からの報告に登場するのは Folio 版 (nn4) では Rosse と Angus の 2 名に対し、ダヴェナント版では Macduff 一人に変更されている箇所。書き込み者は 2 名の登場を示すト書き Malcolm の台詞 "The worthy Thane of Rosse." をそれぞれ括弧で囲み、text space に "Ent. Macduff", "Noble Macduff" と書き込む。隣接する右欄外には "this in Shadwell" なる書き込みもされているが、これについては後で触れる。

以上が、セカンド・フォリオの *Macbeth* 冒頭ページで書き込み者が行った作業であった。語句の置き換えは、煩雑になるとの判断

からか、この後ほとんど見られない。書き込み者の注目は、人物配置の変更にかかわる登場ト書きや発話者指示、そしてフォリオでは少ない登退場以外のト書きへと、もっぱら向かう。Malcolmの立太子宣言のあと、王をもてなすために一足先に出立することになった Macbeth が独白に移る場面に書き込まれた “ Macbeth going out Stops /& Speaks whilst ye K: talks wth /Banquo ” (nn5b text space) はその典型例である。そばの欄外には “ in Shadwell ” とある。つづく独白の 1 行目の脇に “ aside ” と書き込まれているが、こちらはダヴェナントにはないト書きであって、ロウ本依拠の書き込みである。モノクロの TIF ファイルでこの書き込みを読むしかなかった以前には気づかなかったことであるが、2011 年に実物をあらためて調査したところ、“ in Shadwell ” と “ aside ” という書き込みで使われているインクの色は、長いト書きの書き込みで使われているそれと同じではないということに気づかされた。まずは、ダヴェナント版を使用しての作業が行われ、あとからロウ本を使った作業に臨んだ際、すでに行っていた書き込みに、これは改作版によるもの、と断り書きを入れた、とみるのが妥当であろう。実際、“ in Shadwell ” は書き込み中に幾度となくでてくるが、いずれの場合にもインクの色の変化から、上述のような事情が容易に想像される。改作者を一貫してシャドウエルとしているのは、書き込み者の記憶違いとしか言いようがない。

ダヴェナント版には原作にない場面が挿入されている箇所が数カ所ある。書き込み者はそのすべてを、“ ad 30 lines / in new bet: / Macd: & Lady / in Shadow: ” (oo4) のように行数つきで記録する。どの箇所でも、記録された行数は劇場で上演に立ち会っただけでは 達成不可能と思われる精度のものである。こうした書き込みで使われた “ new ” という文字は、上述の “ in Shadwell ” とは違って、黒っぽい色のインクで書かれていることに 注目しておきたい。

Macbeth 最後の Finis Box (に貼り付けられた紙の上を中心) に書き付けられた配役付きの登場人物表に関しては、なぜか、それがダヴェナント版に依拠したものであるとはいえない。書き込まれた登場人物表は、*The London Stage* が記録している 1707.12.29 (12.27 とおなじ) のものと Hecate と Fleance が抜けている他は同じである。書き込み者がテキストを参照したことは間違いないと思われる (行数を数えている) ダヴェナント版 (Shadwell はまちがい) にも The Persons Names という登場人物表が 10 名の俳優名を併記したかたちで印刷されている。調査できた 1674, 87, 95 年版とも同一のものであったが、これを書き込み者は使用せず、もっともあたらしい情報を使っていたことになる。「新しさ」が書き込み者にいかに重

要であったかを示す証拠でもある。そして、ここでは、ステージからページへ、が成立している。

Macbeth のケースが示していた翻案を資料としたアップデートの特徴をまとめるとおおよそ次の 4 点になる。1 . 新旧の人物配置の違いに対しては、登場指示や発話者指示に関心を払い注意深く記録しようとしている。2 . 魔女たちの宙乗り (flying) や効果音、音楽というスペクタクル要素を示すト書きは無視しているが、主人公の傍白を支える舞台処理を示すト書きは書き込みの対象としている。3 . 新版 (new) における場面の挿入 (added) や削除 (omitted)、および変更 (altered) を正確に記録しようとしている。その方法は、削除や変更箇所の場合、両サイドのマージンに括弧を書き入れるというものであった。“ Omitted in the new ”, “ altered in the new ” という説明をとる場合とともなわれない場合が見られるが、*Macbeth* においては、欄外括弧は “ altered ” の表示がなければ、基本的に「省略」をあらわすために使用されているといえる。4 . 同じセリフでも語句の置き換えは頻繁におこなわれているものの、それを記録しようとはしていない。アップデートは結果としてごちゃごちゃ書き込みのある読みにくいものにフォリオ がなってしまうことを避けなければ目的を達成できない、そういう作業なのである。しかし、稀に語句の置き換えを書き入れており、そこには書き込み者のある種の価値判断 が垣間見える可能性もあるだろう。

ロウ本のインパクト

Gc.9 には、*Macbeth* のほか、*Timon of Athens* にも “ begins ye 3d Act / in Shadwell ” (kk3) などロウ本依拠では説明のつかない多くの書き込みがあるし、喜劇では、*A Midsummer Night 's Dream* と *The Taming of the Shrew* にも、同様の書き込みが見られる。いずれにも当時上演されていたアダプテーションに依拠した書き込みが少なからず残されている。“ not in new ” (S2v ほか) や “ omitted in ye new ” (oo1 ほか) など、散見される “ new ” という語は、やはり注目に値するであろう。同時代のシェイクスピア上演を背景にもつとおぼしきこれらの書き込みを詳細に検討すればするほど、そこに、あくまで書籍という出版物を媒体として、フォリオに納められた各作品の本文を、それらの「新しい」本文と比較して得た情報で「アップデート」しようという本コピーの所有者 / 読者の書き込みの意図が浮かび上がってくる。 ‘ John Prater ’ という署名をおそらくは購入した年だったのであろう、 ‘ 1698 ’ という年号とともにフォリオのタイトルページに残しているこの読者は、フォリオ版のシェイクスピアをアップデートの必要な本文と認識し、ロウ本に出会う前からその作業に着手していたという仮説を検証できたのではないだろう

か。

The Tempest をドライデンとダヴェナントによる改作 *The Enchanted Island* を使ってアップデート作業に着手していた書き込み者は、半分ほど終えたところで作業を中断する。改変の度合いが大きく作業が困難であったことも中断の理由のひとつであった可能性はあろう。しかし、もし作業中にロウ本 (Nicholas Rowe, ed. *The Works of Mr. William Shakespear*, 6 vols, 1709) との出会いがあったと仮定したらどうであろうか。ロウは、'Some account' で *The Enchanted Island* の Prologue から 20 行を引用して、当代きっての大家ドライデンの見識を称える一方、その改作については、以下のように (Prologue を引用する直前に) 敢えて不満を表明していた。

[*The Tempest*] has been alter'd by Sir William D'Avenant and Mr. Dryden; and tho' I won't Arraign the Judgement of those two great Men, yet I think I may be allow'd to say, that there are some things left out by them, that might, and even ought to have been kept in. [xxiv-xxv]

書き込み者は Rowe の Dryden 引用の前半 10 行をフォリオ前付け(*4)の Hugh Holland の詩につづけて書き込み、*The Tempest* 冒頭に "Row says sevral[sic] things might & ought to [be] kept in" (A1) と書き込んでいる。ロウのこのくだりが、新しい版(改作)を権威としてそれに依拠してアップデートをしてきたこの読者に、ある種のショックを与えたとしても不思議はない。上述の作業の中断がこのショックによるものであった可能性はないだろうか。それはまた、書き込み者をして作家評伝の要約から口絵の言語化まで、徹底したアップデート作業を 900 ページにおよぼんとするフォリオ全体に対し取り組ませることになる、ロウ本との出会いのインパクトでもあったのだから。

ステージからページへというアップデートは、結局のところ、長くて数年で幕となったのである。

(3) 国際シンポジウムの開催

日本からは廣田篤彦京都大学准教授、フランスからは Jean-Christophe Mayer CNRS 教授の 2 名の研究協力者を招聘し、2013 年 7 月 19 日 (金) に明星大学において、一般の人々も対象として、「シェイクスピアの読者たち (Shakespearean Readership: An International Symposium on Readers and Users of Shakespearean Folios)」を開催した。参加者は平日であったこともあり、一般のシェイクスピア愛好家を中心におよそ 150 名を数え、近隣の一般のひとびとのシェイクスピアへの関心の高さがうかがわれた。なかには、「シェイクスピア」というテーマ

で夏の自由研究に取り組んでいる高校生の参加もあり、一般の人々にも親しんでいただける成果発表の機会の大切さにあらためて気づかされた。

(4) アメリカシェイクスピア協会 第 43 回年次大会 (2015 年 4 月 1 日~4 日) でワークショップ (プログラム 58: Reading the First Folio Then and Now, 4 月 2 日 開催) に Jean-Christophe Mayer 教授とともに co-leader として参加した。明星大学所蔵ファーストフォリオ (MR774) の書き込みについていくつかの優れた知見を得ることができた。

(5) サントメールで発見された書き込みのあるファースト・フォリオ

2014 年に発見されたコピーについて、Jean-Christophe Mayer 教授らが中心となって開催した国際学会に出席した。日本からの参加は本研究代表者のみであったので、日本シェイクスピア協会の学会誌 *Shakespeare Journal* vol 2(2016) に学会報告を投稿、掲載された。コピーをめぐる歴史的、宗教的、書誌学的文脈が語られた、刺激的な学会であり、本研究にとって期待通り示唆的であった。また、参加者の一人であった Howard Blanning マイアミ大学名誉教授からの申し出を受け、フォリオの転写データの共有が可能になったことは、本研究にとって、書き込みの転写データ作成に少なからぬ支援となることが期待される。

(6) *The Shakespeare First Folio: A Descriptive Catalogue* (2012) の書評

ファースト・フォリオに限られた「世界総覧」である本書の出版は、書き込みの情報も搭載し、本課題にとって極めて重要、有用なツールの誕生であった。ただし、明星大学やフォルジャー図書館所蔵本を数点選び出して調べたところ、不正確な記述が散見されるなど、残念な点もすくなくなかった。書評は Sumimoto, Noriko, "Book Review: Eric Rasmussen and Anthony James West, eds., *The Shakespeare First Folios: A Descriptive Catalogue*" (Basingstoke, 2012), *Cahiers Elisabeth Cahiers Elisabethans: A Biannual Journal of English Renaissance Studies*, 82 (Autumn 2012), 88-90 頁。

(7) 冊子体の成果報告書

国際シンポジウムでの Jean-Christophe Mayer 教授と廣田篤彦准教授、および研究代表者のトークの原稿も加えて、冊子体の成果報告書を 2016 年 3 月に作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

住本規子、「グラスゴー・コピーの書き込みの特徴 *The Two Gentlemen of Verona* への書き込みの転写とともに」、『明星国際コミュニケーション研究』第 8 号 (2016) 1-30 頁。

住本規子、「読者から読者へ 書物のもうひとつの役割とグラスゴー大学所蔵ファースト・フォリオの書き込み」、『明星国際コミュニケーション研究』第 7 巻 (2015) 29-51 頁。

住本規子、「ある 18 世紀初頭のシェイクスピア読者」、『日本ジョンソン協会年報』第 38 巻 (2014) 14-18 頁。

Sumimoto, Noriko, “Updating Folios: Readers’ Reconfigurations and Customisations of Shakespeare”, *Early Modern Literary Studies*, Special Issue 21 (2013) not paged. [http:// extra.shu.ac.uk/emls/si-21/07-Sumimoto_Updating%20Folios.htm](http://extra.shu.ac.uk/emls/si-21/07-Sumimoto_Updating%20Folios.htm)

井上歩・住本規子、「明星大学所蔵ファースト・フォリオ (MR774、West201) の書き込み *Hamlet* を中心に」、『明星国際コミュニケーション研究』第 5 巻 (2013) 1-20 頁。

〔学会発表〕(計 4 件)

住本規子、「グラスゴー大学所蔵ファースト・フォリオに見る初期読者の書き込み」、『第 54 回シェイクスピア学会 (2015 年 10 月 10 日、於北海道教育大学函館校)』

Ingulsrud, John E. and Noriko Sumimoto, “Analyzing the marginalia of Shakespeare’s First Folio: The identities and stance-taking of a seventeenth-century reader of *Hamlet*”, Oita Text Forum, Workshop 5 Text and Context (2013 年 11 月 30 日、於豊後高田市真玉町コンサートホール)

井上歩・住本規子、「明星大学所蔵ファースト・フォリオ (MR774) の書き込み *Hamlet* を中心に」、『第 51 回シェイクスピア学会 (2012 年 10 月 13 日、於秋田大学)』

住本規子、「ステージからページへ? あるシェイクスピア・フォリオ本の書き込み」、『日本英文学会第 84 回全国大会 (2012 年 5 月 2 日、於専修大学生田キャンパス)』

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住本 規子 (SUMIMOTO, Noriko)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号: 10247174